

南アジア

古代・中世

二〇〇七年には〈世界歴史大系〉の『南アジア史』（山川出版社）が刊行された。第一巻は先史・古代（山崎元一・小西正捷編）、第二巻は中世・近世（小谷正之編）、第三巻は南インド（辛島昇編）、第四巻（予定）は近代・現代（長崎暢子編）をそれぞれ扱う。各巻ともに一線の研究者によって分担執筆され、最新の研究情報を網羅的に紹介している。また、建築・美術史や文学史、科学史などの研究成果を盛り込むのも特徴である。南アジア史への多角的なアプローチによる新たな研究視角・分野の創造を期待させる。

先・原史時代 考古学が研究の対象とするこの時代区分においては、新石器文化期からインダス文明期にかけての北西インドに関する論考が中心であった。宗墓秀明「南アジア、丘陵地の住居と社会」〔青柳洋治先生退職記念論文集「地域の多様性と考古学」丸井雅子監修、雄山閣〕は、ヒマラーヤ山脈中に前三〜前二千年紀に展開した新石器文化とパローチスタン高原東縁部に前七〜前三千年紀に展開した新石

器・青銅器文化を取り上げ、両者の住居・集落構造の展開の違いとその背景にある歴史的背景の違いを関連づけて論じる。小茄子川歩「インダス式印章のデザインシステム」〔東海史学〕四二はインダス式印章の図柄の分析によって、いくつかの配列パターンを見出し、その配列パターンの変化と図柄の細部の変化に、前半期と後半期という二つの時期を推定する。さらに印章の図柄の変化はインダス文明社会と周辺世界の関係性の変化を反映したものと指摘する。近藤英夫・上杉彰紀・小茄子川歩「クッリ式土器とその意義」〔岡山市立オリエンタ美術館研究紀要〕二二は、前二三〇〇〜前一九〇〇年頃に指定されるインダス文明後半期を中心としてパローチスタン高原南部に展開したクッリ式土器の歴史的意義について考察する。クッリ式土器は東のインダスと西のイラン高原の双方に関わる要素を含むことを指摘し、前三千年紀後葉のイラン高原を中心とする文化交流ネットワークの再編にクッリ式土器を創出した集団が関与することを論じる。さらに交流ネットワークの変化は西南アジア世界に広く関係し、インダス文明社会の衰退の一因である可能性を指摘している。このほか『インド

考古研究』二八号には若手の研究者を中心とした論考が数多く収められている。

また、総合地球環境学研究所では長田俊樹を代表として「環境変化とインダス文明」と題したプロジェクトが二〇〇七年度より開始された。インド・パキスタンでの発掘調査も実施・計画されており、今後の調査・研究の進展が期待される。

建築・美術史 西インドの仏教石窟寺院およびガンダーラ仏教彫刻に関する論考が目立った。福山泰子「アジャンター石窟における「従三十三天降下」図について」(『密教図像』二五)はアジャンター石窟群第一七窟前室左側壁、第一六窟ヴェランダ左後壁、第一六窟右廊前廊側壁柱、第二一窟左側壁に描かれた「従三十三天降下」を主題とする、もしくはその可能性が指摘される壁画を経典の記述と対照させつつ詳細に検討する。第一七窟前室左側壁ではその仏殿前面という位置とも関連して仏伝図でありながら礼拝像的な構成をとる一方、第一六窟ヴェランダ左後壁では臨場感のある説話性の強い構図が、また第一六窟右廊前廊側壁柱では正面性の強い礼拝像的な構図をとることが指摘される。こうした同じ主題を描きながらも構成に大きな違いがみられることに對して、

一つには壁画が描かれる位置とそこで設定可能な描画空間の範囲という石窟全体の構造的要因と、その一方で六世紀中頃に大規模寄進から小規模寄進へと転じる歴史的要因が指摘される。また、同じく福山による「ピタルコーラー第三窟に残る後期壁画について」(『美学美術史研究論集』二二)は「ピタルコーラー石窟群中の大規模チャイティア窟である第三窟に残る後期壁画について、その

壁画主題および様式・表現の特徴を詳細に検討する。近傍に位置するアジャンター石窟群に研究が集中する中で、ピタルコーラー石窟群の壁画の重要性を再認識させる。永田郁「西デッカ地方の後期仏教石窟における仏殿本尊脇侍像・守門像について」(同)はアジャンター、アウランガーバード、エローラ、カーンヘーリーの後期仏教石窟を取り上げ、仏殿本尊の脇侍、守門像について検討を加える。観音菩薩像の対像にヤクシヤ的な図像要素の存在を確認し、ヤクシヤの造形が後期窟の図像構成の展開の中で果たした重要性について論じる。

安元剛「スワート・カシュミール地域のブロンズ像の様式的源流について」(『密教図像』二五)は、七―一世紀頃にスワート地方やカシュミール地方で多く制作されたブロンズ製仏像が、密教の興隆と同期的にチベット方面へと影響を与えたことを確認した上で、北西インド山間地域におけるガンダーラ様式から六世紀以降の様式への変遷をバジョール地方およびスワート地方の作と比定される作例をもとに跡づける。さらにギリシヤ・ローマ美術の影響を色濃く残すガンダーラ美術からの変貌を、ローマ帝国の衰退によって引き起こされた中世社会への変化という視点から評価しようとしている。宮治昭「大仏の出現」(『仏教芸術』二九五)はダレルとバーミヤーンの大仏について取り上げ、これらの山間地域が交通路として重要な歴史的意味を有していたこと、そして交易活動の繁栄を背景として楽土の実現をもたらす弥勒に対する信仰をもとに大仏が造立されたことを説く。とりわけ、二〇〇一年に破壊されたバーミヤーンの大仏に関する検討には、宮治の長年に

わたる研究成果が凝集されている。小泉惠英「ザールデリー遺跡出土石彫群の復元的考察」(『MUSEUM』六〇六)は、東京国立博物館が一九九五〜九九年まで発掘調査を行ったパキスタン北西辺境州に所在するザールデリー遺跡の仏教寺院の僧房から一括出土した石彫一三七点の組み合わせを復元する試みである。詳細な検討の結果、一三七点の石彫には二組の三葉形大アーチが含まれることが明らかにされている。高さ四メートルにも及ぶ大アーチ浮彫をどういった建造物に設置していたのか、またなぜ組み合わせて構成することを意図して制作された石彫群が解体されて僧房に収められることになったのか謎は多いが、ザールデリーの仏教僧院がたどった歴史を窺わせる貴重な資料である。それとともに、従来個別の浮彫として研究されてきたガンダーラの浮彫彫刻が本来どのように組み合わされて僧院を荘厳していたのか、新たな研究視角を提供する重要な研究である。漆紅「見る」「見せる」金剛力士について(『美術史学』二七)は、ガンダーラ様式の浮彫を資料として金剛力士が担う役割について考察する。ガンダーラ様式の浮彫において釈尊に伴うかたちで表現される金剛力士には、その姿態に大別して二つの形式がある。一つは釈尊にまなざしを向けるもの、今ひとつは二本指を立て釈尊とは反対を向くものである。漆は経典の記述を繕きながら、前者では金剛力士が釈尊を見ることによってその相好を提示し、後者では釈尊の仏徳を讃歎する金剛力士を表現していることを指摘する。

また、袋井由布子による『インド、チョーラ朝の美術』(東信堂)は、チョーラ朝の歴史をたどりながら、同王朝下で造営され

たヒンドゥー寺院群について詳細に解説する。ヒンドゥー美術の研究が相対的に乏しい我が国の研究状況にあって、南インドを代表するチョーラ朝美術が網羅的に紹介されたことは画期的である。

古代史・前期中世史 石川寛「エレファンタ石窟考」(『東京女学館大学紀要』三)は、かねてより造営年代に関する論争が行われてきたエレファンタ島のヒンドゥー石窟群について、文献史料と石窟浮彫の様式から検討を加える。六〜八世紀のデカン高原の政治史を銘文資料をもとに概観し、従来エレファンタ石窟群の造営者としてカラチュリ朝を推定する根拠となってきた同朝クリシュナラージャ王(在位五五〇〜五七五年頃)の貨幣について検討し、この貨幣が同王の在位期間よりも長期にわたって流通していた事実を確認する。さらにエレファンタ石窟群の彫刻様式を、カラチュリ朝の滅亡にかかわった前期チャールキヤ朝の都バーターミに残る石窟群とラーシュトラクータ朝の開鑿によるエローラ石窟群中の初期石窟群にみられる彫刻様式と比較する。エレファンタ島の造営がカラチュリ朝によって行われた可能性はなく、カラチュリ朝と前期チャールキヤ朝双方の封臣としてコンカン地方北部を支配したマウリヤか、もしくは前期チャールキヤ朝下でコンカン地方南部を統治したバプーラ家によって造営された可能性を提示する。従来の年代論では特定の資料に偏っていた状況の中で、諸資料を総合的に検討した論考として重要である。また同じく石川による「カンナダ語・ハルミディ碑文の再検討」(『南アジア言語文化』五)は現存最古のカンナダ語文献であるハルミディ碑文について、これまでの諸説を繕きながら再検討を加える。碑文に登場

するカークスタなる人物をカダンバ朝第五代カークスタヴァルマン王とみなす説に対して、カダンバ朝の従属下にあったバタール家当主カークスタ・バットーランとするG・S・ガイの説を認める一方で、ガイが提示した五世紀末〜六世紀初という年代を斥けて従来一般的であった五世紀中頃とする。

また、九〜一〇世紀の南アジアを知る上で貴重な資料である『中国とインドの諸情報』(Akbar al-Sin wa'l-Hind) (『東洋文庫』)が家島彦一によって訳出された。本書は未詳の著者によって九世紀前半頃に記された第一の書と、一〇世紀初頭にアブ・ザイド・アルハサンによってまとめられた第二の書からなり、いずれも当時状況を呈したインド以東への海洋交易を通して収集された膨大な諸情報を収めている。中国に関する記述が卓越するものの、インドについても人々の生活や習俗を記録しており、重要な情報源となっている。平易かつ的確な邦訳はもとより、家島のこれまでの研究成果を凝集した注・解説が付されており、当該時期の研究者だけでなく南アジアおよびその周辺世界に関心をもつ者にとって必読の書である。

中世後期 和田郁子「インド・ゴルコンダ王国における君主と港市・海上交易の関係」(『東洋史研究』六六(一))はデカン高原に盛衰したゴルコンダ王国の海上交易・港市に対する意識・姿勢を、一七世紀中葉のスルターン・アブドゥッラーと港市マシリパトナムとの関係を通して考察する試みである。オランダ東インド会社の文書類とゴルコンダ王国の年代記『ハディーカトゥル・サラティーン』(Hadizat al-Salim)の記載の検討を通して、

海洋交易で栄えた王国が交易活動をどのように捉えていたか、単に交易活動にとどまらない問題を提起する。一六世紀末にゴルコンダ王国によるコロマンデル沿岸地域の支配が確立すると、「王の船」と呼ばれる巡礼船がアラビア方面へと派遣されることとなり、さらにスルターン・アブドゥッラーの治世になると、ペルシャ湾や東南アジア方面へも「王の船」が派遣されるようになって、海洋を通じた外交・交易活動が活発化する。しかし、スルターン・アブドゥッラーの死去(西暦一六七二年)にともなって西方への船舶の派遣がみられなくなり、一六八七年にはゴルコンダ王国自体がムガル朝によって滅ぼされてしまう。和田の論考は南アジアのイスラーム王朝と海洋交易の関係を具体的に示してくれる重要な研究である。鈴木喜久子「下ベンガルにおける塩交易の展開」(『歴史評論』六八八)は、下ベンガル地方における塩交易の展開を軸にムガル朝、ヨーロッパ勢力、在地系勢力の関係について考察する。一九世紀中頃にはベンガル地方での塩の生産は停止するが、それ以前においては塩が交易・租税の対象品として重視されていたこと、そして塩生産・交易の管理権の掌握が諸勢力にとって重要案件であったことを明らかにする。塩交易を通して、植民地化の過程を明らかにする重要な論考である。

以上、二〇〇七年に発表された諸研究を瞥見してきたが、等しく感じるのは南アジア世界の広がりや、諸々の空間レベルの認識を通して有機的に構築していくことの重要性である。ここで紹介した諸研究は時代・地域を超えて、南アジア世界の重層性を感じさせると同時に、南アジア世界と周辺世界との連関的つながりを

も教えてくれる。自らの学問的関心を狭隘な時空間軸に押しとどめるのではなく、諸々の歴史的事象を相互に関係づけて研究対象に対する理解を深めていくことに歴史学の醍醐味があることを改めて認識した次第である。

(上杉彰紀)

近現代

二〇〇七年は、日印文化協定締結五〇周年を記念する日印交流年であり、インドの堅調な経済成長にも支えられ、多くの雑誌でインド特集が組まれた。一方、アフガニスタンにおけるタリバーン勢力の復興や、パキスタンにおけるムシャラフ大統領の人氣凋落、B・ブットー暗殺等、南アジア全体としては政情不安を示す材料も多く、それらの歴史的背景や内情の解説も多くなされた。歴史学分野では、一九三〇・四〇年代の日印関係が焦点となる一方、若手研究者の出版活動も目立った。入門書としては山川出版社より〈世界歴史大系〉の小谷汪之編『南アジア2 中世・近世』や辛島昇編『南アジア史3 南インド』が出版された。

ネイション形成、言語州形成の問題に関しては、近年に引き続く多くの研究成果が出された。杉本浄『オリヤ・ナシヨナリズムの形成と変容』（東海大出版会）は、一九世紀後半から一九三六年オリッサ州誕生に至るオリヤ・ナシヨナリズムの形成、変容過程を、インド・ナシヨナリズムとの対立関係の解消、オリッサ州の境界を巡る議論等に注目しつつ明らかにした。詹彩鳳「ナガ民族自決運動とネルー政権」（1945-56）『南アジア研究』一九は、ネ

ルー政権下におけるナガランド政策の変遷を分析し、宮本万里「現代ブータンにおけるネイション形成」(『人文学報』(京大) 九四)は、一九五〇年代から半世紀にわたる「ブータン人」の属性とその境界の変化を明らかにした。また、未だ不安定な状況の続くアフガニスタンに関しては、鈴木均編『アフガニスタン国家再建への展望』(明石書店)が、「国家統合」をキーワードに同国の歴史と現状を分析した。

植民地化が在地社会やその言説に与えた影響については、一九世紀前半ボンベイ管区における植民地官僚の言語訓練制度を、言語の階層化という視点から捉えたKiyosuke Adachi, "Locality and Universality of Vernaculars" (Hiroynuki Kotani et al. eds, *Marga* (Manohar, New Delhi)) や、宮本隆史「植民地統治と監獄制度」(『南アジア研究』一九)等が出版された。足立論文の掲載された *Marga* は、二〇〇五年に東京で開催された第一回国際マハーラシュトラ会議の報告書であり、近現代分野では本邦からは他に、石田英明、立川武蔵が執筆した。

戦間期に関しては、志賀美和子「南インド・マドラス州の労働運動(1918-38年)にみる労働者の自主化」(『歴史学研究』八二七)、「マドラス州における非バラモン運動の展開」(『紀要』(東大・東文研) 一五二)、「労働争議における植民地政府の役割」(『アジア経済』四八一-二)が、マドラス州における労働運動の性質とその変遷を、共産主義や政府との関係、リーダーシップや組織の性質等の分析から問い直した。

先述の通り、一九三〇・四〇年代の日印関係が大きな焦点と